

Tu 多様体 回答

tRue

2025 年 10 月 27 日

節末問題

§1 ユークリッド空間上の滑らかな関数

1.1 C^2 級だが C^3 級でない関数

$f: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ を $f(x) = x^{1/3}$ とし, $g: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$g(x) = \int_0^x f(t)dt = \int_0^x t^{1/3}dt = \frac{3}{4}x^{4/3}$$

とする. 関数 $h(x) = \int_0^x g(t)dt$ は C^2 級だが $x = 0$ で C^3 級ではないことを示せ.

Proof. $h(x)$ の 1 階微分, 2 階微分, 3 階微分を計算する.

$$h'(x) = g(x) = \frac{3}{4}x^{4/3},$$

$$h''(x) = g'(x) = f(x) = x^{1/3},$$

$$h'''(x) = f'(x) = \frac{1}{3}x^{-2/3}.$$

したがって, $h''(x)$ は全ての x で定義されるが, $h'''(x)$ は $x = 0$ で定義されない. よって, $h(x)$ は C^2 級だが $x = 0$ で C^3 級ではない. \square

§8 接空間

8.10 極大値

多様体上の実数値関数 $f: M \rightarrow \mathbb{R}$ が $p \in M$ において極大値をもつとは, $f(p) \geq f(q)$ がすべての $q \in U$ について成り立つような p の近傍 U が存在することである.

(a) 开区間 I 上で定義されている微分可能な関数 $f: I \rightarrow \mathbb{R}$ が $p \in I$ において極大値をもつならば, $f'(p) = 0$ であることを示せ.

Proof. $f(p) \geq f(q)$ がすべての $q \in I$ について成り立つように I として取り直しても良い.

$q < p$ で $f(q)$ が増加, $p < q$ で $f(q)$ が減少することを踏まえると以下 2 つが成り立つ.

$$\lim_{q \rightarrow p^-} \frac{f(q) - f(p)}{q - p} \leq 0$$

$$\lim_{q \rightarrow p^+} \frac{f(q) - f(p)}{q - p} \geq 0$$

f が微分可能であるため, 左極限と右極限は等しくなければならず, $f'(p) = 0$ が従う. \square

(b) C^∞ 級関数 $f: M \rightarrow \mathbb{R}$ が極大値をとる点は f の臨界点であることを証明せよ.

Proof. $p \in M$ を f が極大値をとる点とし, $X_p \in T_p M$ を接ベクトルとする. $c(t)$ を始点 p における速度ベクトルが X_p であるような M 上の曲線とすると, $f \circ c: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は 0 において極大値をもち, (a) より

$$(f \circ c)'(0) = 0$$

$$\implies (f \circ c)_* \left(\frac{d}{dt} \right) = f_{*,p}(X_p) = 0$$

となる. これは任意の $X_p \in T_p M$ について成り立つため, $f_{*,p}$ は零写像であり, p は f の臨界点である. \square

§11 滑らかな写像の階数

11.1 球面の接ベクトル

\mathbb{R}^{n+1} における単位球面 S^n は, 方程式 $\sum_{i=1}^{n+1} (x^i)^2 = 1$ によって定義される. $p = (p^1, \dots, p^{n+1}) \in S^n$ に対して,

$$X_p = \sum a^i \partial / \partial x^i \Big|_p \in T_p \mathbb{R}^{n+1}$$

が点 p で S^n に接するための必要十分条件は, $\sum a^i p^i = 0$ であることを示せ.

Proof. $f: \mathbb{R}^{n+1} \rightarrow \mathbb{R}$ を

$$f(x^1, \dots, x^{n+1}) = \sum_{i=1}^{n+1} (x^i)^2 - 1$$

とすると, $S^n = f^{-1}(0)$ である.

X_p が点 p で S^n に接するなら, ある曲線 $c: \mathbb{R} \rightarrow S^n$ が存在して, $c(0) = p$, $c'(0) = X_p$ を満たす (命題 8.16) ^{*1}. $i: S^n \rightarrow \mathbb{R}^{n+1}$ を包含写像とすると, このような曲線 $c(t)$ につい

^{*1} ここは必要十分条件だと思うが, Tu 多様体の回答では必要性のみを用いていたのでそれに沿った. 一般には十分ではないのかもしれないが, 私はよくわかっていない.

て, ここで, $f \circ i \circ c: \mathbb{R} \rightarrow \mathbb{R}$ は全ての t で 0 となるため,

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{d}{dt}(f \circ i \circ c)(t) \\ &= (f \circ i \circ c)_* \left(\frac{d}{dt} \Big|_t \right) \\ &= f_{*,c(t)}(c'(t)) \\ &= \sum_{i=1}^{n+1} \frac{\partial f}{\partial x^i} \Big|_{c(t)} \dot{c}^i(t) \end{aligned}$$

となる*2. $t = 0$ のとき,

$$\begin{aligned} \sum_{i=1}^{n+1} \frac{\partial f}{\partial x^i}(p) \cdot a^i &= 0 \\ \iff \sum_{i=1}^{n+1} 2p^i \cdot a^i &= 0 \\ \iff \sum_{i=1}^{n+1} a^i p^i &= 0 \end{aligned}$$

となる.

$T_p S^n$ と $\sum_{i=1}^{n+1} a^i p^i = 0$ を満たす $T_p \mathbb{R}^{n+1}$ の部分集合はどちらも同じ次元をもつベクトル空間で, 上述の議論から前者は後者に含まれるため, 同型である. \square

11.2 平面曲線の接ベクトル

(a) $i: S^1 \hookrightarrow \mathbb{R}^2$ を単位円周の包含写像とする. この問題では, x, y を \mathbb{R}^2 の標準座標とし, \bar{x}, \bar{y} をその S^1 への制限とする. よって, $\bar{x} = i^*x, \bar{y} = i^*y$ である. 上半円周 $U = \{(a, b) \in S^1 \mid b > 0\}$ においては, \bar{x} は局所座標であり, ゆえに $\partial/\partial \bar{x}$ が定義されている. $p \in U$ に対して

$$i_* \left(\frac{\partial}{\partial \bar{x}} \Big|_p \right) = \left(\frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial \bar{y}}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial y} \right) \Big|_p$$

を証明せよ. したがって, $i: T_p S^1 \rightarrow T_p \mathbb{R}^2$ は単射であるが, $\partial/\partial \bar{x}|_p$ は $\partial/\partial x|_p$ と同一視することはできない.

*2 本来は終域の接空間の基底 $\frac{\partial}{\partial z} \Big|_0$ を掛ける必要があるが, ここでは省略している.

Proof.

$$\begin{aligned} i_* \left(\frac{\partial}{\partial \bar{x}} \Big|_p \right) &= \left(\frac{\partial x \circ i}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial y \circ i}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial y} \right) \Big|_p \\ &= \left(\frac{\partial \bar{x}}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial \bar{y}}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial y} \right) \Big|_p \\ &= \left(\frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial \bar{y}}{\partial \bar{x}} \frac{\partial}{\partial y} \right) \Big|_p \end{aligned}$$

□

(b) \mathbb{R}^2 における滑らかな曲線 C について, x の C への制限である \bar{x} が局所座標になるような C のチャート U をとり, (a) の結果を一般化せよ.

Proof. (a) の変形は曲線の方程式に依らない. 適切にチャートが取れていれば結果は同様. □

11.3 コンパクトな多様体上の滑らかな写像の臨界点

コンパクトな多様体 N から \mathbb{R}^m への滑らかな写像 f は臨界点をもつことを示せ.

Proof. 第 1 成分への射影 $\pi: \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R}$ を用いて, $\pi \circ f: N \rightarrow \mathbb{R}$ を考える. N はコンパクトで, f と π は連続であるから $\pi \circ f(N)$ はコンパクトで, そのため有界閉集合. よって, $\pi \circ f$ は最大値 (と最小値) をもつ.

$p \in N$ を $\pi \circ f$ の最大値を与える点とし, (U, x^1, \dots, x^n) を p を含むチャートとする. 以下を考える.

$$\begin{aligned} (\pi \circ f)_* \left(\frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p \right) &= \frac{\partial f^1}{\partial x^i}(p) \cdot \frac{\partial}{\partial f^1} \Big|_{f(p)} \\ &= 0 \end{aligned}$$

したがって, $f_* \left(\frac{\partial}{\partial x^i} \Big|_p \right)$ の第 1 成分は全ての i について 0 であり, そのため f_* は p で全射でない. つまり, p は臨界点である. □

別解 1^{*3}

Proof. f が臨界点をもたないと仮定すると, f は沈め込み (つまり, 適切なチャートを取れば f は射影). ここで $\pi: \mathbb{R}^m \rightarrow \mathbb{R}$ を第 1 成分への射影とすると, $\pi \circ f: N \rightarrow \mathbb{R}$ も沈め込みである (つまり, 適切なチャートを取れば $\pi \circ f$ は x^1). しかし, $\pi \circ f(N)$ はコンパクトであるから最大値を持ち, その点で臨界点となってしまう^{*4}ため矛盾. □

別解 2^{*5}

^{*3} Tu 多様体の回答

^{*4} 8.10 参照.

^{*5} Tu 多様体の別解

Proof. f が臨界点をもたないと仮定すると, f は沈めこみ. 系 11.6 より f は開写像, 滑らかという仮定も踏まえて同相写像となる. しかし, N はコンパクトであるから $f(N)$ は開なコンパクト集合となるが, \mathbb{R}^m の部分集合でその条件を満たすものは空集合のみで, 矛盾する. \square

11.4 包含写像の微分

単位球面 S^2 の上半球面においては,

$$u(a, b, c) = a \text{ および } v(a, b, c) = b$$

で与えられる座標写像 $\phi = (u, v)$ がある. ゆえに, 半球面上の任意の点 $p = (a, b, c)$ において, 偏導関数 $\partial/\partial u|_p, \partial/\partial v|_p$ は S^2 の接ベクトルである. $i: S^2 \hookrightarrow \mathbb{R}^3$ を包含写像とし, x, y, z を \mathbb{R}^3 の標準座標とする. 微分 $i_*: T_p S^2 \rightarrow T_p \mathbb{R}^3$ は $\partial/\partial u|_p, \partial/\partial v|_p$ を $T_p \mathbb{R}^3$ に写す. したがって, 定数 $\alpha^i, \beta^i, \gamma^i$ を用いて

$$\begin{aligned} i_* \left(\frac{\partial}{\partial u} \Big|_p \right) &= \alpha^1 \frac{\partial}{\partial x} \Big|_p + \beta^1 \frac{\partial}{\partial y} \Big|_p + \gamma^1 \frac{\partial}{\partial z} \Big|_p, \\ i_* \left(\frac{\partial}{\partial v} \Big|_p \right) &= \alpha^2 \frac{\partial}{\partial x} \Big|_p + \beta^2 \frac{\partial}{\partial y} \Big|_p + \gamma^2 \frac{\partial}{\partial z} \Big|_p \end{aligned}$$

と書ける. $i = 1, 2$ について, $(\alpha^i, \beta^i, \gamma^i)$ を求めよ.

$$\begin{aligned} i_* \left(\frac{\partial}{\partial u} \Big|_p \right) &= \left(\frac{\partial x \circ \phi^{-1}}{\partial u} \frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial y \circ \phi^{-1}}{\partial u} \frac{\partial}{\partial y} + \frac{\partial z \circ \phi^{-1}}{\partial u} \frac{\partial}{\partial z} \right) \Big|_p \\ &= \left(\frac{\partial u}{\partial u} \frac{\partial}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial u} \frac{\partial}{\partial y} + \frac{\partial \sqrt{1-u^2-v^2}}{\partial u} \frac{\partial}{\partial z} \right) \Big|_p \\ &= \left(1 \cdot \frac{\partial}{\partial x} + 0 \cdot \frac{\partial}{\partial y} - \frac{u}{\sqrt{1-u^2-v^2}} \cdot \frac{\partial}{\partial z} \right) \Big|_p \end{aligned}$$

同様に

$$i_* \left(\frac{\partial}{\partial v} \Big|_p \right) = \left(0 \cdot \frac{\partial}{\partial x} + 1 \cdot \frac{\partial}{\partial y} - \frac{v}{\sqrt{1-u^2-v^2}} \cdot \frac{\partial}{\partial z} \right) \Big|_p$$

である. よって,

$$\begin{aligned} (\alpha^1, \beta^1, \gamma^1) &= \left(1, 0, -\frac{u}{\sqrt{1-u^2-v^2}} \right), \\ (\alpha^2, \beta^2, \gamma^2) &= \left(0, 1, -\frac{v}{\sqrt{1-u^2-v^2}} \right). \end{aligned}$$

11.5 コンパクトな多様体の 1 対 1 のはめ込み

N がコンパクトな多様体のとき, 1 対 1 のはめ込み $f: N \rightarrow M$ は埋め込みであることを証明せよ.

Proof. $f(N)$ に部分空間位相を入れたものが f の下で N が同相であることを示せば良い.
連続であることは $V \in \mathcal{O}_{f(N)}$ に対して $f(N) \cap V' = V$ なる $V' \in \mathcal{O}_M$ が存在し,

$$f^{-1}(V) = f^{-1}(f(N) \cap V') = f^{-1}(V') \in \mathcal{O}_N$$

より従う.

開写像であることを示す. 多様体の定義にハウスドルフ性が含まれていたことを踏まえると, f はコンパクト空間からハウスドルフ空間への連続写像であるから, 閉写像である*⁶. さて, 任意に $U \in \mathcal{O}_N$ を取ると, 以下が成り立つ.

$$\begin{aligned} U \in \mathcal{O}_N &\implies N \setminus U \in \mathcal{C}_N \\ &\implies f(N \setminus U) \in \mathcal{C}_M \\ &\implies M \setminus f(N \setminus U) \in \mathcal{O}_M \end{aligned}$$

ここで, $M \setminus f(N \setminus U)$ を V とおくと, $f(U) = f(N) \cap V$ である. よって任意の U に対して $f(U) = f(N) \cap V$ なる $V \in \mathcal{O}_M$ が存在し, これはすなわち $f(U)$ が $f(N)$ の部分空間位相に関して開であることを意味する.

以上より $f: N \rightarrow f(N)$ は $f(N)$ の部分空間位相に関して同相写像であり, したがって f は埋め込みである. □

11.6 $SL(n, \mathbb{R})$ における乗法写像

$f: GL(n, \mathbb{R}) \rightarrow \mathbb{R}$ を行列式写像 $f(A) = \det A = \det[a_{ij}]$ とする. $A \in SL(n, \mathbb{R})$ に対して, 偏導関数 $\partial f / \partial a_{kl}(A)$ が 0 でないような (k, l) が少なくとも 1 つ存在する. 補題 9.10 と陰関数定理を用いて, 次を証明せよ.

(a) $SL(n, \mathbb{R})$ における A の近傍で, $(i, j) \neq (k, l)$ なる a_{ij} たちが座標系をなし, a_{kl} はそれ以外の成分 $a_{ij}, (i, j) \neq (k, l)$ に関する C^∞ 級関数であるようなものが存在する.

Proof. $g = f - 1$ とおけば, $SL(n, \mathbb{R}) = g^{-1}(0)$ である. $GL(n, \mathbb{R})$ のチャートとして $(GL(n, \mathbb{R}), a_{11}, a_{12}, \dots, a_{nn})$ を取ることができ, $\partial g / \partial a_{kl}(A)$ が 0 でないような (k, l) を取れる. 補題 9.10 より, A のある近傍において a_{kl} を g で置換して $SL(n, \mathbb{R})$ に適合する $GL(n, \mathbb{R})$ のチャート $(U, g, a_{11}, \dots, a_{nn})$ が得られる. この $SL(n, \mathbb{R})$ への制限 $(U \cap SL(n, \mathbb{R}), a_{11}, \dots, a_{nn})$ は $(i, j) \neq (k, l)$ なる a_{ij} たちが座標系をなす $SL(n, \mathbb{R})$ のチャートである. さらに, 陰関数定理より $U' \subseteq U \cap SL(n, \mathbb{R})$ なる A の近傍 U' において

$$g(a_{11}, \dots, a_{nn}) = 0 \iff a_{kl} = h(\{a_{ij}\}_{(i,j) \neq (k,l)})$$

となる C^∞ 級関数 h が存在する. この U' が求める近傍である. □

*⁶ コンパクト空間の閉部分集合はコンパクトで, コンパクト空間の連続写像による像はコンパクトとなり, ハウスドルフ空間のコンパクト部分集合は閉集合であるため.

(b) 乗法写像

$$\bar{\mu}: \mathrm{SL}(n, \mathbb{R}) \times \mathrm{SL}(n, \mathbb{R}) \rightarrow \mathrm{SL}(n, \mathbb{R})$$

は C^∞ 級である.

Proof. (a) のチャート及び関数 h を取ると, 成分ごとに C^∞ 級関数であることが明らか.

丁寧に述べれば, $\bar{\mu}$ は $j: \mathrm{SL}(n, \mathbb{R}) \rightarrow \mathrm{GL}(n, \mathbb{R})$ と $\mu: \mathrm{GL}(n, \mathbb{R}) \times \mathrm{GL}(n, \mathbb{R}) \rightarrow \mathrm{GL}(n, \mathbb{R})$ とを用いて

$$\bar{\mu} = j^{-1} \circ \mu \circ (j \times j)$$

と書いて, j, j^{-1} が C^∞ 級であることが (a) より従い, μ も C^∞ 級であるから, 合成も C^∞ 級であると言える. \square

11.7 誘導位相と部分空間位相

N と M を滑らかな多様体とし, $f: N \rightarrow M$ を 1 対 1 のはめ込みとする. 像 $f(N)$ には次の 2 種類の位相を与えることができる.

(a) 誘導位相. 集合 $V \subset f(N)$ が開集合であるための必要十分条件は, $f^{-1}(V)$ が N の開集合となることである.

(b) 部分空間位相. 集合 $V \subset f(N)$ が開集合であるための必要十分条件は, $V = U \cap f(N)$ となる M の開集合 U が存在することである.

誘導位相が部分空間位相より細かいこと, すなわち, 誘導位相がより多くの開集合をもつことを証明せよ.

Proof. 部分空間位相の開集合 V を取ると, 誘導位相でも必ず開集合となることを示せば良い.

$V = U \cap f(N)$ なる $U \in \mathcal{O}_M$ が存在するとする. f の連続性より, $f^{-1}(U) \in \mathcal{O}_N$ である. ここで, $f^{-1}(U) = f^{-1}(U \cap f(N)) = f^{-1}(V)$ であるから, $f^{-1}(V) \in \mathcal{O}_N$ となり, V は誘導位相に関しても開集合である. \square